

ヴァンピールの花嫁 孤独な娘は吸血鬼に嫁入りする

八谷紬 Tsumugi Hachiya



アルファポリス文庫

約束
いたし
ましょ
う。
私
が、
殺
し
て
さ
し
あ
げ
ま
す。

一・ヘーゼルの空蟬

静かな夜だった。

めずらしく風の音も虫の声もしない。それなのに比翠は目が覚めた。やけに意識がはっきりとしているのに気づいて、おもむろに身体を起こす。

胸騒ぎとはまた違う、けれど心に漣が立つ。部屋に変わったところはないことを確かめ、比翠は立ち上がった。足の裏に畳のひんやりとした感触が伝わり、静かに息を吸う。

障子を開けて板張りの廊下に出る。硝子戸がらすの向こう、空に星が見えたが月の姿はない。

比翠はそっと、錠を外し硝子戸がらすを開けた。秋の冴えた空気が入ってくる。沓脱石くつぬぎしにゆつくりと下り、庭に出た。

何か意図があったわけではない。ただなんとなく、外の空気を吸おうと思っただけだった。比翠が暮らすこの家は人を避けるような辺地にある。隣の家は遠く、鬱蒼うつそうとした木々に囲まれている。寝間着のままでも誰かに見られることはない。

はずだった。

「勘が鋭いんだな。さすがと言うべきか」

無音。そのなかに響く声は、三日月のように細く鋭かった。

比翠が驚いて声の主を探したときには、すでに後ろから抱えられていた。ひつ、と息を呑む暇もなく、口元が手で塞がれる。その氷とも思える冷たさに、比翠は身を強張らせた。

「ようやく、死ぬことができる」

耳元でそんな声が聞こえた。そしてすぐさま、首に強い痛みが走る。

嘔まれている。そう比翠が理解できたと同時に、男の身体は力を抜いた。思わず比翠は振り返る。

その額に、二本の角が生えていた。

しかしそれを見たのは一瞬。次の瞬間、男は庭先の木に激突していた。

「お嬢様！」

幹が軋きずむような、折れるような音と一緒に、使用人である穂風ほかぜが比翠の目の前に現れる。その手にはなぜか刀が握られていた。

大丈夫ですか、という穂風の声と、立ち上がる男の悪態が重なる。比翠は穂風の背に隠された。しかし比翠はどういうことか状況が呑み込めず、その脇から男の姿を視

界に入れた。

立ち上がった男を、比翠の背にある月が照らす。

その額に、角はなかった。

「ああ」と男は嘆いた、ように比翠には見えた。天を仰いでから乱れた髪をさらにかき散らす。

それからすつとこちらを見据えた。穂風の大きな背中に緊張が走るのがわかる。

だが男が見ているのは穂風ではない。比翠だった。

「吸血鬼の花嫁か」

悔しそうに。苛立つように。

月明かりに浮かぶその白い肌の顔は、恐ろしいほどに美しかった。

まるで外国の本の挿し絵のよう。そう比翠が感じたと同時に男は、姿を消した。文字どおり、目の前から突然消えてしまった。

不意に、虫の音が響く。

張りつめていた空気が切れる音がした。穂風の自分を心配する声を聞きながら、比翠は男が立っていた場所をただじっと見つめていた。



帝都、^{ほうきょう}鳳京。西欧文化の影響と自由を謳歌する人たちが賑わう華やかな街中から離れた場所にある小さな古い家。そこが花宮比翠の世界のすべてだった。

朝食を済ませ、比翠はさつそく針を手取る。シヨールの刺繍は完成間近だった。今日には終わらせてしまおうと、指定された図案を確認し、赤色の刺繍糸を用意する。

茶の間の縁側。秋晴れの光に当たるシヨール。最近の流行だという西洋のモチーフを入れた意匠に、比翠はふと青色の刺繍糸を添えてみた。この隅だけでも涼しい色を入れたほうが、そう考えてみはするものの、すぐに青色の刺繍糸をしまう。代わりに指定どおりの赤い糸を取って、ゆっくりと刺し始める。

勝手なこととはしない。それは比翠がいつも心に留めていることだった。自分では何もわからないのだから、言われたとおりにすべきなのだと。

針を布に刺し、糸を整える。その繰り返し。しかしひたすらにそれを重ねることが、比翠にとっては一番の平穏でもある。まっさらな布に、様々な糸で模様を、絵を描く。ふっくらと刺すことで絹糸の艶をさらに美しく表現する。それが小さな達成感をくれる。自分は無力ではないと思わせてくれる。

たとえ自由はなくとも。

この小さな家には、比翠の他にふたりしか暮らしていない。そのふたりともが、比

翠が幼い頃から一緒にいてくれる使用人だ。

家族はここから離れた屋敷に住んでいる。もつとも、家族といっても父の後添いである継母とその連れ子の妹、異母弟だけだ。母は三歳のときに病で死に、父は十五歳のときに事故で死んだ。継母や妹たちとは共に暮らしたことがない。父が再婚した七歳のとき、比翠は使用人のふたりと一緒にここに引っ越した。

鳥のさえずりに、比翠は顔を上げる。ずっと刺繍枠の中だけを見ていると目が疲れてしまう。鳥の姿は見えなかったものの、軋ひびだらうと比翠は予測した。

比翠に、物事を教えてくれたのは女学校ではない。使用人の真伊と穂風のふたりだ。刺繍や裁縫の針仕事は、花宮家が営む呉服店の縫箔師ぬいはくしや和裁士たちに教えてもらった。ただそれも父が再婚する僅かな間でのこと。筋がいいと褒められたのを糧にずっと独学で研鑽けんえんしてきていた。

再び刺繍に視線を落とす。これを仕上げたら、作っておいた半襟や巾着などの他の物と一緒に、あちらの家に納めに行こう。そう考えながら、比翠はひとつ息を吸う。赤という指定の花びらを、様々な赤色の糸で刺していく。立体的に見えるように、艶やかでいて優しく見えるように。せめて自分の好きなことだけは、嘘をつかないように。

比翠は、めずらしい病に罹かっている。

そう、幼い頃から言われていた。

人前には出てはいけない。身体が丈夫ではないのだから、無理はしてはいけない。静かに暮らすようにしなさい。

父はそう繰り返した。比翠自身は、熱を出したり寝込んだりなど、体調を崩したことはほとんどない。しかしいざというときが怖いことから、そういう病気だからと、病の名も知らぬまま十九年生きてきた。

父の言葉を疑ったことはない。離れて暮らしても父はよくこの家に来てくれたし、そのたびに比翠を喜ばせようと可愛らしい髪飾りや甘いお菓子などを持ってきてくれた。それがなくとも、比翠には大事にされている実感があつた。

しかしその父も死んだ。

その日から、この家を訪れる者はいない。

鳥がまたさえずる。その声に比翠は息を吸い、針を刺す。

それでもいい。比翠はそう考えている。人前に出られない自分でもこうやって刺繍をして小間物を作ることができる。それがどれだけの支えになるかは知らないけれど、ほんの少しでも貢献できていれど願う。

家から出られず、女学校にも通えず、友人もいない。

知っているのは、この家と、ここから見える景色。祖父が建て七歳まで住んだあの

家への道のり。あの家の玄関ホール。

それだけ。

ただどそれを恨んでもしかたがない。それに自分には他に選択肢もないのだと、比翠にはわかっていて。真伊と穂風もいてくれる。贅沢を言える立場にはないのだと。

虚しさや寂しさがあつたとて、それは受け入れるべきだろうと。

ひと刺し、ひと刺し、彩っていく。図案のとおり、指示のとおり。艶やかな絹糸が、花となり広がっていく。こんな自分でも、華やかな世界を描くことができるのだ、と。こようやくひとつひとつ積み重ねていくしかない。ある日突然、真つ白な布に刺繍ができ上がったりはしない。いつか、こようやくいけばいつか、家族として過ごせる日が来るかもしれない。

気づけば、最後の花びらを埋め終えていた。枠から外し、全体を広げて見る。赤い薔薇をちりばめた意匠は少々派手にも思えた。しかしこれがいいのだと継母は言う。

店に置いたところで、買う人がいるのかどうかも比翠は知らない。次に作る物を指定されるから、作る。

ふう、と比翠はひと息ついた。不意に、家がやたらとうら寂しい気がしてくる。真伊はでかけたものの、穂風はいるはずだ。なのにどうしてか、がらんどくに感じてしまう。

庭に目を向けると、秋めいた景色が映る。真伊と共に手入れをしている庭には萩や竜胆が咲いていた。奥の木々の先に薄が揺れているのが見える。この季節はどうしたって物寂しくなりがちだ。だからだろうと比翠は刺繍道具を片づけ、広縁から庭へと下りた。

するとどこからともなく、穂風が現れる。

彼はいつもそうだった。初めて花宮家に来たのは比翠が四歳のとき。身体が弱い比翠のために、御守り役として雇われた。当時十五歳だった穂風を、比翠は忍者みたいだと思ったことがある。いつだって彼は、足音なく歩き、比翠が探すや否や現れる。

しかし今日のその姿は落ち着きがない。思案げとでもいう表情を浮かべ、視線をあちこちへと向けている。

「どうかしたの？」

比翠の質問に、穂風がはっ、とした顔を見せた。

「申し訳ありません。お気になさらず」

そう言われたところで、気にならないわけがない。比翠も何気なくあたりを見回してしまふ。

「先程犬の鳴き声が聞こえたもので……野犬でもないかと思っただけですから」

犬の鳴き声なんてしただろうか。比翠ははて、と首を傾げた。だがしかし、穂風は五感が鋭いことも知っている。そういうえば犬も聴覚や嗅覚に優れているらしい。力もあることから番犬として飼われるものも多いと聞いた。

番犬、と思いながら穂風を見た比翠は、思わずふふと笑ってしまった。穂風は襖よりも背が高く、未だに鴨居に頭をぶつけることがある。いくら気をつけてと声をかけても駄目なのだ。そんな犬はさすがにいないだろう。もちろん忍者でもない。

けれどその精悍^{せいかん}そうで丸っこい目元や通った鼻筋は、本で見た大きな洋犬に似ていなくもない。

穂風は比翠が笑ったのを見て、安心したように微笑んだ。

「野犬なんて、今まで見たことがないけれど」

「だからといっていいとはいえないけれど」

それもそうかと比翠は頷く。家をなくして彷徨^{さまよ}っているのなら、この家で飼ってもいいのだが、とまで考えてからその余裕はないか、と思い直す。

「少し散歩でもしますか」

そう言って穂風が手をすつと差し出してきた。

その左手には、火傷の痕がある。

正確には左腕全部と、左肩、左の首から耳までと広範囲にある。花宮家に来たとき

にはすでにあつたもので、比翠はその原因を聞いたことはない。幼い比翠には「そう

いうものののだ」という認識しかなく、それが火傷の痕だと知ったのは父が再婚したときだった。

初めて穂風を見た継母が浮かべた顔を、比翠は忘れることができない。彼は常に詰め襟の洋服を着ているため、見える範囲なんて少しだけだったにもかかわらず。

「もう子どもじゃないのに」

比翠はそう言いながらも、穂風の左手に自分の右手を重ねた。父や母に手を引いてもらった記憶などない。唯一、覚えているのが彼のこの手のひらだった。

べつにどこに行きたいわけでもなかった。ここから出たとて、行けるのは周囲の林だけ。

ふたりの周りを、強く風が吹いた。今日のそれはやけに冷たい。結っていた髪が乱れ、比翠は思わず左手で首元を押さえた。

そのうなじには大きな黒い痣^{あざ}がある。

よく言えば大輪の牡丹^{ぼたん}にも見えるそれは、生まれたときからあったのだという。身体の成長と共に大きくなり、今では首の後ろ全体に広がっている。

病だから人前には出てはいけない。

それと同じぐらい、その痣^{きざ}は人には見せてはいけない、と言われてきた。この家に

いるときは意識しないものの、本宅に向かうときは必ず襟巻きで隠していく。そしてそれは継母の前でも外しはしない。

本当は、病なんて嘘で、これが理由なんじゃないかと思うことがある。自分では合わせ鏡でもしないと見えないけれど、継母や妹の反応は覚えている。この首が醜くて、父は人前に出したくなかったんじゃないだろうか。だから華やかで美しい娘のいる継母を後添いにしたのではないだろうか。

そう思っても、口にしたことはないまま。

風が止む。押さえた首元から手を離すと、右手が強く握られた。

けれど、彼は何も言わなかった。

比翠もまた、何も口にしなかった。

葉擦れの音と共に鳥がさえずる。青紫色の桔梗ききょうの蕾つぼみが、風船のように風に揺れる。日本人にはめずらしい、比翠の榛色はしきみの瞳に、空のかなたをゆく雲が流れる。

「ただいま戻りました」

どれぐらい庭にいたのか。その声に比翠が振り返ると、広縁に真伊が立っていた。いつもきつちり結わえている髪が、風のせいにかめずらしく乱れている。

「おかえりなさい」

「どこかおでかけにでも」

「いえ、ただ庭に出ていただけよ」

比翠がそう言うのと、繋いでいた手が離される。僅わずかなぬくもりが残った指先が、風に触れた。

そうでしたか、と真伊は真顔のまま頷いた。

「今夜のお支度、手伝ってもいい？」

「刺繍はよろしいので」

比翠は真伊のそばまで行ってから、ええと頷いた。

「それではお嬢様の好きなものを」

真伊はほとんど笑わない。というよりも感情が顔に出ないのだ。穂風も表情の変化に乏しいが、彼女は輪をかけていつも同じ顔だった。

それを比翠は、愛想がないとか怖いとか思ったことがなかった。彼女はいつも、誰が相手でも変わらないからだ。

花宮家やってきた時期は穂風とほぼ変わらない。ただ彼女は最初から比翠についていた穂風と違い、ここに越してくるときに数人の女中のなかから選ばれただけだった。それも彼女がひとりいれば事足りたからだ。使用人はそれぞれに担当する仕事があるものだが、真伊はすべてをそつなくこなしてしまふ。

そう父が選んだと、比翠はわかっている。ただ同時に、火傷の痕がある穂風と愛想

がよくない真伊がいなくなって安堵したかのような継母の態度も忘れてはいない。

「まだお支度までは時間がありますので」

確かにまだ昼にもなっていない。風は冷たくとも今日の空は高く、絹のように光るすじ雲が薄くさあつと広がっている。

その秋めいた景色に、比翠はそれこそ散歩でもしてこようと穂風を見た。すると先程いた場所から動かぬままだった彼は、またもやあたりを見回していた。

「また犬の声がしたの？」

比翠が問うと、穂風は曖昧な返事をする。

「犬が？」

「真伊は、帰ってくるときに聞いた？」

「いいえ。私は何も」

そう言いながら、真伊は穂風をじっと見つめている。その視線に気づいた穂風は「申し訳ありません」と口にした。

「気のせいでしょう。しかし念のため、お嬢様は中にお入りください」

そういえばまだ屋敷に住んでいた頃、庭に野犬が入ってきたことがあったと比翠は思い出した。腹を空かせていたのかだいぶと気が立った犬で、穂風が追い払ってくれたのだった。

「私は少し周囲を見てきます」と穂風は木々のなかに消えていく。

「穂風は、人を守る仕事に就いていたら活躍したでしょうね」

その背を見送りながら比翠がこぼす。

私なんかの御守りじゃなく、もつと守る必要性のある人の。それならこんな狭い世界で、ひっそりと日々を過ごすこともなかっただろうに、と。

「穂風が聞いたら、ひどく落ち込みますから。おやめに」

しかし即座に真伊にそう返された。思わず真伊の顔を見ても、彼女はいつもと同じ表情のまま。

「彼は自分でお嬢様にお仕えすると決めたのですから」

「穂風に聞いたの？」

「聞かずとも」

わかっています、と言うように真伊は比翠を見た。彼女はいつも最後まで言葉を発しない。

そうなのだろうか。穂風はあるときまだ十五歳だった。父に言われてしかたなく来たのではないだろうか。

「……真伊は？」

そう聞いてから、比翠は軽く後悔を覚えた。

「ええ、もちろん」

その後悔を膨らませない速度で、真伊が答える。

「でも仕事としてでしょう。それなら」

たとえ望みと違って選ばなきゃいけないことはあるのではないか。

そう言おうとして、真伊の視線に止められる。

めずらしく、彼女の口角が上がっていた。

「たとえ他に選択肢がなくても、歩き出すのは自分でなければ」

それはいつもと変わらない、低く落ち着いた声だった。

歩き出すのは自分。比翠は口の中でそれを復唱する。

胸のなかに、小さな波紋ができた。それはひとつ、ふたつと増えていき、波と波がぶつかり、新たな模様を描いていく。

「お茶を淹れましょう。中にお入りに」

真伊はそう言って、比翠を促した。言われたとおり、沓脱石を踏む。

冷たい風がうなじを撫でた。

——自分で歩いたことなどあったらどうか。

そう思いながら、比翠は家の中へと入る。



首の傷は、そう深いものではなかった。

血もすでに止まり、真伊は手当を終えて救急箱を片づける。

比翠が寝室にしている居間の隣、茶の間に三人が揃っていた。しかし誰も口を開かず、沈黙がずつしりと場を支配している。

ひときわ沈んでいるのが穂風だった。部屋の隅に正座をしたまま、けして顔を上げようとしない。対して真伊はいつもと変わらなかった。時折、穂風に視線を送るものの、何か言うわけではない。

どうしたものか、と比翠はため息をつく。

あの男が消え、起きてきた真伊に比翠を預けてから、穂風はずっとこの調子だった。なぜ刀を持っているのか、何が起こったのか、どういうことか。そう訊ねても「申し訳ありません」と繰り返すばかり。

唯一わかったのは、穂風もあの男のことは知らない、ということだけだった。

「お嬢様、お話は明日に」

この沈黙に業を煮やしたのか、埒が明かれないと思ったのか、真伊がそう言い出した。「だけど、いくらなんでも……」

「お嬢様も気が高ぶっていらっしやるでしょうから。穂風もまさか切腹までは」
切腹。かつて本で読んだ古い風習が出てきて比翠は面食らってしまう。しかしそれ以上には穂風がその言葉に反応していた。

「……穂風、その手があったかのような顔は」

ただそれも、真伊がすぐさまやめると制止する。

比翠も驚き慌てて「それは許しません」と思わず口にしてしまった。

「とにかく」と真伊が仕切り直す。

「少し落ち着いてから話をしましょう。穂風、あなたは」

「朝まで警戒にあたります」

「私はここにおりますから。お嬢様は少し横に」

破られた沈黙はそのまま押し切られてしまった。でも、と比翠も抵抗を見せたものの、こういうときの真伊に勝てるはずがない。

半ば強引に部屋に戻され、布団に入れられた。枕元に麦湯が置かれている。その香ばしさが湯気に混じって立ち上る。

とはいえ、眠るように言われたとて眠れるわけがなかった。すでに首の痛みは僅か^{わず}なもので、それよりも巻かれた包帯のほうが息苦しく感じてしまう。着替えた寝間着がまだひやりとしていて、肌馴染まない。

代わりに、あの冷たい手の触感をまざまざと思い出した。続けて刺されたようなあの痛みが再び首に走った気がして、ぎゅっと目を閉じる。すると今度はあの額に生えた角が脳裏に蘇る。

人に見えたのに、人ではないとしか思えない。

ではなんなのだろうか。

わかるわけもない、と比翠は呟いた。もしかしたら自分はまだ寝ていて、夢を見ているのではないかとさえ思ってしまう。

『ようやく、死ぬことができる』

しかしあの声が、そうではないと否定するかののように頭のなかで響く。

死ぬことができる、そう言って男は自分を噛んだのだ。つまり死ぬために噛んだことになる。

その理由が、比翠にはさっぱりわからない。もしや自分の病気が関係していて、感染して死ぬということだろうか。いや、彼は自分を噛んだ後に嘆いているように見えた。つまり、すぐに死が訪れることを期待していたのではないだろうか。

だけど死ななかった。

そして比翠を見て言ったのだ。

『ヴァムピールの花嫁か』と。

意味がわからない、と比翠は寝返りを打った。あの場に穂風もいたが、その言葉は確かに自分へ向けられていた。だがそのヴァムピールという言葉など聞いたことがない。

それに穂風だって謎だ。あのとき男を吹き飛ばしたのは間違いなく穂風だった。五感や身体能力が優れていたのは知っていたけれど、あのときの穂風はいつもとまったく違って見えた。

もしかして野犬がいるのではという心配は、今夜の予感だったのだろうか。彼はこういうことが起こりうると知っていたのだろうか。

比翠は布団を頭まで被って、そのなかで丸くなった。どこまでも小さいその世界で、昔読んだ本をふと思い出す。

それは吸血鬼という、人の血を吸う怪物の物語だった。

目が覚めると、すっかり日が高くなっていた。昨日と変わらぬ秋の空に、比翠は胸を撫でおろす。

真伊はあのあと、茶の間で寝たという。比翠の姿を確認すると、手早く朝食を用意してくれた。いつもと同じ、味噌汁と漬け物。けれど比翠の好物である卵焼きは、いつもよりほんの少し大きかった。

眠れるわけがない。そう思っていたのに、随分と寝過ごしてしまった。そのことを微かに恥じながらも、比翠は穂風を呼んだ。

穂風は、卓袱台を挟んで比翠の真正面に座った。真伊がお茶を淹れてくれたが、彼女は座ることなく台所に戻ってゆく。

穂風の左側には、杖のような長物が置かれる。その持ち手を見て、あれが昨日見た刀だろうと比翠は予測した。

宣言どおり、穂風は一睡もしなかったらしい。しかし眠たげな様子は一切ない。大丈夫かと比翠が訊ねると「一日二日ぐらい、寝なくとも平気です」という答えが返ってくる。

「昨夜、お嬢様を襲ったのは、吸血鬼です」

そして比翠が何かを言う前に、穂風は話を始めた。

「吸血鬼、というのはあの西洋の物語に出てくる……」

かつて読んだ本の内容を再び思い出す。あれは確か女性だった。愛する男の人の口づけで蘇り、人の血を吸う夜叉になったのだ。

「その吸血鬼と、私の知っている吸血鬼が同じかはわかりません。彼らは人の血を吸う鬼です」

鬼、と比翠は口にした。鬼といえはお伽噺に数多く出てくる、角の生えた怪物。

確かに、あの男の額には角が生えていた。比翠ははっきりと覚えている。

「ゆえに、彼らは人を襲います。特殊な能力を持ち、不老不死と言われています」

「本当に、そんなものが」

いるのか、と聞きそうになって比翠は言葉を呑み込んだ。いたのだ。比翠を襲い、その首に噛みついたものが。

急に手元がそわそわして、比翠は目の前の湯飲みを両手で包んだ。予想より高かった熱が、しかと比翠を繋ぎとめてくれる。

「穂風は、どうしてそういうことを知っているの？」

ふう、と息を吐き、代わりに質問をした。

穂風はもう俯きはしなかった。どんなことも答えよう、受け止めようという意志が、その瞳に見てとれる。

「私は、鬼狩りとして育ちました」

謹厳とした声が、聞き慣れぬ単語を発す。

「鬼狩り、とは」

「吸血鬼を退治する者のことをそう呼んでいます。どこかは申し上げられませんが、私たちはとある山中にて、幼い日から鬼狩りとなるべく育てられます」

かたり、と手のなかの湯飲みが揺れた。

「つまり、花宮家に来たときは」

「まだ青二才でしたが、どうにか実戦に出られるようになった頃でした」

穂風は眉ひとつ動かしていなかった。ただ淡々と比翠に話をしてくれている。まるでそれが自分の務めだと言わんばかりに。

「比翠様」と、穂風が低くはつきりとした声で呼んだ。

「お父上は、このことはお嬢様にはけして話さぬようにとお命じになりました。何も知らないまま、生涯を終えてほしいと……ですが、昨夜のことがあった以上、お嬢様にも知る権利があるかと思っています」

それでも、と彼は続ける。

「もし、知りたくないとお嬢様が仰るのなら、私はこの先を話しません。ただ、今後二度と、お嬢様が吸血鬼に襲われないよう、命に代えてもお守りしますと誓うのみです」

そう話す穂風の瞳は、限りなく真っ直ぐで、淀みなく光を携えていた。日の光ではない、月の光にとてもよく似ている。

比翠はひとつ、息をついた。

何も知らぬまま、生きてきた。言われるがままに、この小さな世界で。

それを不幸だと思ったことはない。ただしかたがないのだと、虚しさを抱えつつも

受け入れてきたただけだ。

このまま、その狭く守られた場所で生きていくのも、悪くはないのだろう。父の願いを聞くのも、間違っではない。

でも自分のなかのどこかで、そうじゃないという声もする。

比翠はゆっくりと、息を吸う。

「教えてちょうだい」

怖さがないわけじゃない。この先を聞いて、後悔しない保証もない。

それでも中途半端なままのほうがつらいと、比翠は決断した。

比翠の答えを聞いた穂風は、ゆっくりと目を伏せ、静かにわかりましたと頷いた。

「お父上は、どうやって知り得たかは定かではありませんが、鬼狩りの里を探し当てました。そこで直談判したそうです。自分の娘を守るために、鬼狩りを雇いたい、と」

「私を？」

「ええ、お嬢様です。そこで当時、修行を終えたなかで最年少だった私が選ばれました」

そんな理由で、という言葉を比翠は呑み込んだ。しかし言わずとも伝わってしまったようで、穂風は困ったように笑っている。

「吸血鬼の話に戻りますが、今はだいぶ数が減ったと言われております。同時に、鬼狩りも随分と姿を消しました。私の育った里はまだありますが、他はもうどこだかなので選択肢はあまりなかったのですよ、と穂風が眉に八の字を寄せた。

「べつに、がっかりしたわけじゃなくて」

慌てて比翠が弁明する。

「私なんかのところになんて、って……そう思っ……」

そこまで言っ、比翠ははた、と動きを止めた。

なぜ、私を守るのか。なぜ、吸血鬼は私を襲ったのか。

そちらのほうが、重要であり、一番聞かねばならないところだ。

「お嬢様なんか、のところにではありません」

穂風はあえて「なんか」のところを強調して言った。

「お嬢様が、冥血の持ち主だからです」

そしてさらにとそう言った。比翠に身構える間を与えないように。

「冥血？」

まったく聞いたことのない単語を、比翠はただ繰り返す。穂風がゆっくりと頷いた。「冥血は吸血鬼にとって毒となる血です。不老不死の吸血鬼を殺すことができます……非常に、稀な血なのです」

「私が？」

「お母上がその血筋だったようです。お嬢様のその瞳と」

そう言いながら穂風は比翠を見た。

「首の痣が、持ち主の特徴なのだと」

比翠は無意識に、うなじに手をやっていた。

母の記憶はほとんどない。ただ臍氣に優しくも凜とした姿だけが浮かぶ。

「母は違ったの？」

「お父上の話では違うとのことでした。ただお母上はご親族にその話を聞いていたそうです。それで、お嬢様が生まれたときにもしかしたら、と」

この痣と瞳がその証拠ということか、と比翠は鏡で見た自分の姿を思い出す。その瞳は確かに真伊や穂風、花宮家で見える者たちとは違う。その昔、妹の華代に「外国のお人形さんみたい」と言われたことがあった。よく見たら緑色が混じった榛色の瞳。それとうなじの大きな黒い花のような痣。まさかそれに意味があったなんて、と比翠は細く息を吐いた。

「もしかして病気ではなく」

「はい。お父上は世間から隠すため、病気だからと嘘をつくことにしたのです」

そうか、と比翠は俯いた。

「私もお嬢様以外の冥血の持ち主に会ったことはありません。ですが里でそのことにについてはよく聞かされておりました。その血を利用しようとする者に囚われたり、吸血鬼に殺……狙われたり……ゆえに、見つからないように生きているのだと」

穂風は落ち着いた声で、ゆっくりと聞かせるように話していた。しかし比翠の耳には、もうその半分も聞こえていなかった。

吸血鬼、冥血、鬼狩り。

自分が知らなかったものが、夢やお伽噺ではないかということが、昨夜を境に大波となつて押し寄せてくる。素直に信じられるかと問われれば、否と答えたかもしれない。それでもその語り手が穂風である点と、あの月に照らされた角が、これは間違いない現実なのだと比翠の肩を揺らしてくる。

ただどこか、落ち着いていくような、呼吸がしやすくなったような感覚が比翠にはあった。

「だから」と比翠は下がっていた視線を穂風に戻す。

しかし彼と目が合うと同時に、その続きの言葉は消えてしまった。自分はどこにも行けず、ここには誰も来ず、ずっと独りだった。それを受け入れていたが、そうではなかったことを比翠は今知ったのだ。

「ヴァムピールの花嫁、って？」

代わりにその問いを続けることにした。

昨夜、あの男は比翠を見てそう言った。悔やんで、嘆いていた。穂風もそれは聞いていたはずだ。

先程の言葉の続きを待っていたであろう穂風は、比翠を追及することなくひとつ頷いた。

「冥血のなかでも、さらに特殊な血の持ち主のことです。女性なら花嫁、男性だと花婿と呼ばれています」

「特殊って、どんな風に？」

間髪入れずに質問した比翠を見て、穂風は僅かに首を傾げ、目を泳がせる。しかしそれも、じっと見つめる比翠に根負けしたかのようにすぐに終わった。

「愛した者にしか効かないのです」

その返答に、今度は比翠が眉をひそめた。

「えっと、その愛した者っていうのは吸血鬼のこと、なのよね？」

「はい。ヴァムピールの花嫁とは、愛した吸血鬼だけに死を与えることができる血液の持ち主のことなのです」

今度こそ比翠は眉間にはつきりと皺を寄せた。言っていることは理解できる。が、意味がわからないといった困惑が頭のなかに広がっていく。

「それは確かなの？」

「昨夜、吸血鬼が血を口にしたにもかかわらず死にませんでしたから」

「そもそも、本当に私は冥血なの？」

「それに関しては……」

穂風が言い淀んだ。比翠を見て、考えて、また比翠を見る。それを数度繰り返して、大きく息を吐いた。

「私の里の長もまずはそれが肝心だと……お嬢様の血を少々いただいて、試されたそうです」

そうなのか、と比翠は小さく驚いた。そんな記憶はまったくない。それに通常では吸血鬼に効かぬなら、どのように確認するのだろう。

「あ、お嬢様と吸血鬼を対峙させたわけではありません。これは里の者でも一部しか知らないのですが、冥血を判断する方法があるらしく……それでほんの少しだけ血を頂戴したと」

「ああ、責めるわけじゃないから。違うの、ただびっくりしたのと……あと」
 本当なのだなあと思つて。

その気持ちは、声にはならなかった。母の勘違いや言い伝えの間違いではないのだと、比翠はその気持ちをじわりと広げていく。

続かなかった言葉を、穂風は待たずに勢いよく頭を下げた。畳に額を擦りつけている。

「昨夜は、私が及ばないばかりにお嬢様を危険に晒してしまい、真に申し訳ございません」

加えて今までにない穂風の大きな声に、比翠は目を丸くした。頭を上げさせようとするも、穂風は頑として受けつけない。

「たいした怪我もないし、穂風は助けてくれたのだから」

大丈夫だから、穂風は悪くないから。何度も言うものの、比翠には穂風の顔は見えないままだった。

「いえ、厭な予感がしていたのに、お嬢様のそばを離れたのが間違いでした」
「離れた、って……外に出たのは私で」

それに同じ部屋で寝てるわけじゃなし、と比翠は言った。穂風は客間として設えたであろう、この家唯一の洋間を居室としていた。比翠の部屋と位置的には近いものの、壁一枚というわけでもない。

「あのとき、私も外に出ていたのです……気になることがあり、確認しに行っておりました」

それが間違いだと、穂風は畳に額を擦りながら言う。その耳の脇に置かれた手の先

が白くなっている。

申し訳ございません。守護者失格です。

繰り返される穂風の謝罪と自責の言葉に、比翠はどうしたらいいかわからなくなっ
てしまった。いいと言っているのにその言葉は届かない。

かといって叱責するようなことなど、と比翠が困り果てた頃、茶の間の襖が勢いよく開けられた。

「いつまでめそめそしてるんですか。起こったことはどうしようもないんです」

そこに立っていたのは真伊だった。その声の調子に、穂風の声がぴたりと止み、顔を上げた。比翠まで背がしゃんとしてしまう。真伊のそんな声を聞いたのは久しぶりだった。

「それよりも今後のことを」

そう言われて、穂風ははっとしたように比翠を見た。その額が赤くなっている。

「また、来る……ことがあるの？」

比翠もそうかと思ひ直す。そういえば冥血めいけつだから見つからないようにしている、と言っていた。つまり見つかってしまった今、危なかったりするのだろうか。

「あの吸血鬼の目的がわかりませんのでなんとも……ですがすぐに退散したことを考えると、可能性は……あ、いえ……」

ありそうだ、ということを穂風が遠慮したことに比翠はすぐに気がついた。諦めたのか、分が悪いと踏んだのか、あの状況ではまいわからないことは比翠でも察することができる。

「じゃあ他の吸血鬼にもそれがばれて、とかは……」

「ないとは言いきれませんが、私がお嬢様のもとに来てから一度もここ鳳京において、吸血鬼を退治せよとの連絡は来ておりません」

ということは大丈夫なのだろうか。それとも住む場所を変えるなりなんなりするべきなのだろうか。

比翠が逡巡していると、茶の間の入り口に立ったままの真伊が口を開いた。

「しばらく様子を見ては。相手の出方もわからず下手に動いて自滅してはなりません。穂風がいつも以上に警戒するのは前提で」

「それはもちろんです。二度とお嬢様を危険な目には遭わせません。命に代えてもお守りいたします」

穂風のことは信頼している。昨夜のことだつて責める気は微塵みじんもない。それどころか、父の願いを聞いてもう十五年も自分のそばにいてくれるのだ。

そう思うと、比翠は楽に息をすることができた。

わかった、と頷いてからひとつ、疑問が頭をもたげた。

「ねえ、真伊も知っていたの？ 私のこととか……吸血鬼の存在とか」

そういえば彼女は当然のように入ってきて、比翠と穂風の会話にも一切反応しなかった。

比翠がそう訊ねると、彼女は眉ひとつ動かさず「ええ」と頷く。

「お父上からお聞きしました、お嬢様とここに来るときに」

「そうなの……えっと……驚いた、わよね？」

知っていたのかという衝撃より、それでも一緒に来る道を選んでくれたということに、比翠の心が痛む。

「いえ、そんなこともあるのか、と」

しかし真伊は、いつもと寸分たが違わぬ調子でそう言った。それは穂風も聞いたことがなかったらしく、目を点にしていた。

「そんなこと、って」

思わず比翠が言ってしまう。

「世の中のすべてを知ることはいんですから。疑ったところで何が変わるわけもなし」

そんなにあっさり、と比翠は真伊をまじまじと見てしまう。もちろん彼女が表情を変えることはない。出会った頃からその態度は一貫している。それどころか見た目す

らも同じに思えてしまう。穂風より五つ上だというのも怪しいぐらいだ。とりあえずここを掃除しますから、と真伊はふたりを追い立てた。穂風は着替えて少し休むというので、比翠も部屋に戻っておとなしくしていることにした。

西洋の吸血鬼と違い、彼らは日が高くとも活動はできるらしい。襲われる危険がないわけではないが、穂風は眠りが浅いらしくそばにさえいれば問題ないと約束してくれた。

「もしかしてずっと、そんな風に」

思わず比翠がそう聞くも、穂風は軽く微笑みただけだった。代わりに自分たちはそういう風に育ち、鍛えられてきているのです、と言った。

刺繍をしようか、本でも読もうか。部屋に入るも比翠は落ち着かない。迷っておもむろに鏡台の前に座った。鏡掛をそっと上げ、自分の姿を映す。

人の血を吸う鬼。

そんなものがこの世にいたのか、とにわかには信じられない。けれど自分の首には包帯が巻かれている。もしかして傷などないのでは、と思えど、その答えは外さずともわかってる。

それでも幾度考えたとして、真伊のようにそうですかと呑み込むことができない。

薄い色の瞳が、自分を見つめている。

めずらしい病だから、いざというときに怖いから。そんな理由で家族とは別れて暮らすことになった。どこに行くこともできず、この小さな世界で、変わらぬ日々を過ごしてきた。

——それが、真実じゃなかったなんて。

悔しいとか、悲しいとかの感情はなかった。かといって、本当のことがわかってすっきりしたという気持ちもない。

むしろ、わからない、もやもやした気持ちのほうがどんどん膨らんでゆく。

あの吸血鬼は「ようやく、死ぬことができる」と言ったのだ。だからこそ、比翠がヴァムピールの花嫁とわかって悔やむような態度を見せたのではないだろうか。

それなら、彼は私を襲うことが目的ではなかったのでは。そう比翠は考えて、鏡のなかの自分を見返す。

いや、と比翠は鏡掛をさっと下ろした。

彼は人間じゃない。鬼なのだ。

鬼の考えることが、人間と同じとは限らない。

比翠は大きく息を吸い、裁縫箱から新しい絹糸を取り出した。

それから二日。特に何も起きず、以前と変わらぬ、小さな世界の穏やかでいて空虚

な生活が戻っていた。

はずだった。

「店が、火事に……？」

仕上げた小間物を継母に渡すべく比翠が花宮の自家へ向かうと、慌ただしさと重たい空気が広がっていた。到着しても誰も出てこず、穂風が使用人のひとりをつまえて事情を聞くと、代々商いを続けてきた呉服店から出火、両隣の店と共に焼け落ちたのだという。

そしてそれは、比翠が吸血鬼に襲われたのと同じ日の夜のことだった。

まだ花宮家に来たばかりという、比翠とそう年の変わらぬ使用人は盛大なため息をつきながら「なんでも相当な借金を背負うことになるのか」と言った。

「借金……」

まさか、と比翠は耳を疑った。家のことは詳しくは知らずとも、父がいざというときのためにと蓄えていたことは教えられている。何かあったときはそれを使って家族を守りなさい、と父は言い残してこの世を去った。

確かに両隣に延焼したとなれば、相応に必要なになるだろう。でもいくらなんでも、と比翠は玄関ホールを見渡す。曾祖父が築いた呉服商を祖父も父も、受け継ぎ発展させてきたはずだ、と。

しかし比翠の目に、先月そこにあつたはずの絵が映らない。あれは父の友人が海外に行ったときに買ってきたもので、とても大切にしていたものだった。

「せっかく仕事が見つかったのに。またあたしは無職ですよ」

白いエプロンをつけた使用人はそう吐き捨て、比翠と穂風の前から消えた。

「お嬢様」と穂風が声をかけてくれる。ゆっくりと比翠がそちらに視線を向けると、彼の瞳はいつも以上に強くしつかりとした光を携えていた。その目を見て比翠はひとつ息を吸う。

そのとき、玄関ホール横の応接室の扉が開いた。使用人が廊下に出て頭を下げると同時に、洋装の男が部屋から姿を現した。その後ろに継母が続く。

比翠は慌てて端に寄り、視線を下げた。ふたりは比翠と穂風には目もくれず、そのまま玄関から外へと出ていった。

客人だったのだろう。比翠はもちろん、その男が誰かは知らない。見送る継母の声が届くと、応接室の中から派手な泣き声が響いてきた。それが妹の華代のものであることは明らかだった。

「あら、来てたの」

戻ってきた継母が比翠を見てつまらなさそうに言う。比翠は「はい」と頷くに留まった。その派手な洋服姿が自分の着物とあまりにも違っていて、言葉が続かな

かった。

「今忙しいのよ。聞いたんでしよう、火事になったって。火の不始末だか放火だかわかんないけど、こっちはてんやわんやよ」

比翠が何かを口にするのを待つことなく、継母は早口でまくしたてた。当たり前のように穂風になど目もくれない。比翠はただそれを喉元がつかえる気持ちで聞いている。

「たいして儲^{もろ}かりもしないのに、大損よ。おまけに隣からも文句を言われて。そんなこと言ったって、火が出たものはしょうがないじゃない。うちだって何ひとつ残ってないのよ。まったく」

まあでも、と継母はそこでひとつ切った。

「借金はね、肩代わりしてもらえそうだから」

え、と比翠は顔を上げた。しかし言葉とは裏腹に継母は頭が痛いと言わんばかりの顔をしている。

「あたしは絶対にイヤだからね！」

すると応接室から大声をあげながら華代が飛び出してきた。その姿もまた、洋装だった。膝下のスカートを翻し、比翠が履いたことのない靴を鳴らして、華代はこちらにやってくる。

「そんなこと言ったってどうしようもないでしょう。じゃああなた、借金まみれの貧乏生活でもいいの？」

「だからってなんでジジイと結婚しなきゃいけないのよ！」

華代の言葉に、比翠はようやく事情を察することができた。比翠は世間から離れて生きているため、どうしても世のことには疎い。とはいえ、物知らずというわけでもない。

借金を肩代わりする条件として、結婚を強いられる。そういうことはままあるのだと、いつの日か真伊が教えてくれたことがある。花宮家も代々続く呉服商、無知ではいられませんからと。

しかし華代が、と比翠が血の繋がらない妹を見ると、彼女がぱっとこちらを向いた。化粧をしているのだろう、やたらと紅い唇が目には焼きつく。

「姉さんが嫁げばいいのよ」

そしてこともなげにそう言い放った。

え、と比翠が反応する前に、背後に控えていた穂風の気配が揺れる。

「だって後家だし、息子もいるから跡継ぎも必要ないでしょう。だったら身体が弱い姉さんでもいいじゃない」

今にも口を開きそうな穂風を、比翠はまずそっと制した。もちろん自分も突然の展

開についていけているわけではない。

「それもそうね。べつに、若い娘なら誰でもいいでしょうし」

その隙にと言わんばかりに、継母もあつさり同意した。

比翠が冥血であることを、継母たちは知らない。父は穂風と真伊にのみ伝えたのだという。だから彼女たちにとって比翠は、不穏な病にかかった先妻の子、でしかない。一度、比翠は勇気を出して共に暮らすことを提案したことがある。父が亡くなってしばらくしてからのことだ。そのほうが余計な費用もかからないし、店のためにもなるかもしれないし、と。

だがそれはばつさりと切り捨てられた。継母は考えることもなく「病気の人間がいるほうが辛くさくて無理」と言った。

傷つかなかったと言ったら嘘になる。でもそのときははしかたがないと諦め、受け入れた。それは今も同じかもしれない。たとえ自分が病気ではないとわかってても、継母たちは知らぬことだ。

「先方は、華代を指名したのでは」

「違うわよ。ただ使いを寄越して、娘を寄越せって言ってきただけ。見てもないのよ」
 なんとか絞り出した言葉も、継母にすぐにかき消された。その隣で華代が、泣いていたのなど嘘のように明るい表情を浮かべている。

先程の客人がその使いだったのだろう。比翠はその姿を思い出そうとしてやめた。

「姉さん、いいでしょう？」

血は繋がっていない。共に暮らしたこともない。

ただ時折、こうして自分が家を訪ねるだけ。それも刺繍の小間物を届けるからであって、継母はまだしも華代が出てくることはほほえない。唯一、懐いてくれる十になった弟は、学才を見込まれ今この家にはいなかった。玄関ホール以外の場所に、あの日、この家を出た日から足を踏み入れたこともない。

それでも、家族には違いない。

華代はまだ十六歳だ。自分と違って器量もよく、女学校も卒業前。きつとこれからもつといい縁談が来るだろう。

比べて自分には何もない。せめてと刺繍を刺し小間物を作るものの、それだっていかにどのこともあるまい。華代と違い縁談に恵まれ家に貢献することもないだろう。

それなら、と比翠は息を吸う。ただひとつ、自分の血のことだけが懸念材料だった。これからも隠れて生きていくべきではないのかと穂風のほうをそつと窺う。

穂風は唇を噛みしめていた。比翠の視線に気づかぬほど俯き必死に耐えている。

十五年、彼はそばにいてくれた。自分なんかのために。父の頼みを聞いて。その姿に、比翠はすつと背筋を伸ばした。

自分にも、父から頼まれたことがある。父と共に過ごせた時間は少ない。けれど大切にはしてもらった。そんな父の死の間際に約束したのだ。家を守り、弟を跡継ぎとして立派にすると。

冥血に生まれ、迷惑しかかけなかった自分を、父は愛してくれた。だからこそその約束だけは果たさねばならない。

そして穂風にも、真伊にも、べつの世界を渡そう。

ぐつ、と腹が据わるのを、比翠ははっきりと感じていた。

「わかりました。私が行きます」

どうせ結婚など望んでいない人生だ。よしんば縁があったとて、自分の自由になるものではない。ならば相手が誰であろうと構わない。それに嫁ぐことさえできれば、その後自分の命がどうなるうと関係ないだろう。

比翠がそう宣言すると、誰よりも強く穂風が反応した。ただそれを気にする者はここにはいない。

「ありがとう姉さん。やっぱり頼りになるわ」

その華代の言葉に感情がこもってないことぐらいは比翠でもわかっている。それでも悪い気持ちになれない自分に辟易しながら、比翠は小さく微笑んだ。

「また連絡するわ」と二階へ行くとする継母を引き留める。そもそも小間物を納め

に来たのだと、比翠が風呂敷包みを差し出す。

「店がないのに」

継母の言葉に比翠ははっとした。再開するのも時間がかかるだろう。それなら今渡したところで、と包みを引っ込める。

しかし継母はそれがかっさらうようにつかみ取った。

「まあ、一応もらっておくわ」とだけ言い残して、二階へと消える。華代も、気づけばもういなかった。

「帰りましょう」

何か言いたげな穂風に向き直って、比翠は笑ってみせた。少し歩きたいから、と帰り道は人力車を使わないことにする。

花宮家は比翠の暮らす家とは違い、区画の整えられた富裕層の多い郊外にある。そのため道も広く、このあたりの象徴となる中央の通りには街路樹も植えられていた。秋色に染まっていく景色を、比翠と穂風は並んで歩く。どこかの庭に咲いているのか、金木犀の香りがただよってきた。

「本当に、よろしいのですか」

きれいな道には、ふたり以外の姿はなかった。そこに穂風の声だけが消えてゆく。比翠はその顔を見はしなかった。真っ直ぐと、その道の先だけを見据える。

「他にどうしようもないもの」

口にした言葉は、驚くほど軽く、すぐに散ってしまった。

「それに、私だって家族の役に立つことができる」

風が吹く。金木犀の香りも消えてしまった。

「ですがお嬢様は……」

穂風が言いたいことは、比翠にはわかっている。

「もう見つかったんだもの。隠れている意味もないでしょう」

「いえ、あの吸血鬼は私が探し出して」

「穂風」

比翠は足を止める。ゆっくりと穂風に顔を向ける。

「いいのよ」

不思議と、腹はくくれていた。

気持ちの面ではまだ不安定な部分はたくさんある。なぜ、どうして。そんな思いが尽きることはない。そして同時に、何もない空間にただ座っているような感覚がある。ひたすら時間が過ぎるのを日の傾きだけで追っているような、幸せでも不幸せでもない、愁然とした想い。

「お嬢様」と穂風が言い、続きを淀ませた。その顔は躊躇いそのもので、泣きそうで

すらある。比翠は思わず笑ってしまう。私よりだいぶ年が上なのに、何歳になったの、と。

初めて会ったときから、比翠にとって穂風は兄のような存在だった。家の中で一番自分と年が近かったのもあるのだろう。忙しい父に代わり遊び相手になり、話し相手になり。人にうつる病ではないと知っていても比翠と接しながらない使用人たちと違い、常にそばにいてくれた。

それも、自分が冥^{めい}け^けで、穂風は鬼狩りだったから。

「ありがとう、穂風」

そう言って比翠は、歩き始めた。家まで歩いては相当時間がかかる。それでも、歩きたい気分だった。

何も言わず、穂風も遅れて歩き出す。大きな歩幅の彼は、すぐに比翠の隣に並ぶ。空を見ると、高く青い。街路樹の銀杏^{いちょう}はその青を背景に黄色く色づき始めている。いつかあの景色を、あの色を刺してみたい。

そう思いながら比翠は、その機会はないかもしれないことに、ほんの少し寂しさを覚えていた。

明くる日、比翠は身の回りのものの整理を始めていた。といってもたいした物はな

い。着物も帯も数は少なく、自分の物といえは刺繍道具ぐらいである。自分が嫁ぐとき、この家はどのようなのだろうか。そう考えていたとき、外から馬のいななきと馬車の音が聞こえてきた。

比翠は窓から外を見た。もう日はだいぶ傾き、やがて夕暮れである。まさかうちではあるまい、と思えど近くに他の家はない。

すぐに真伊が応じる声が聞こえてきた。部屋の外に穂風の気配も感じる。

しばらくして、本家にすぐに来るようという継母からの伝言が比翠に伝えられた。急ぎ着古した紬から銘仙へと着替え、穂風と共に馬車に乗り込む。迎えの馬車なんて、と比翠は落ち着かない。向かいに座った穂風は、あの仕込杖を今日も持っていた。

車中、会話はなく、比翠は慣れぬ馬車の揺れに身体を強張らせていた。対して穂風はじつと耳を澄ませるかのようにして、目だけを動かし続けている。

その穂風が、馬車を降り、玄関ポーチに近づいた途端に足を止めた。杖を持たぬ右手が、比翠の歩みを止める。

「穂風？」

どうかしたの、と比翠が問う前に、開けられた玄関から継母が騒々しくやってきた。昨日とは違い、今日は付け下げを着ている。しかしそれもまた、比翠が見たことのないものである。

「もっとましな格好はなかったの」

開口一番、継母は比翠を見てうんざりとした顔を見せた。比翠はすみませんと小さく謝る。これでも真伊の見立てで気に入っているのだけど、と薄藤色の着物を見てシヨールを掴んだ。うなじは見えないように髪は低い位置で結わえている。

「まあいいわ。急げと言ったのはあちらだから、大目に見てくれるでしょ」

「あちらとは、お客様ですか？」

「ええそうよ。あなたに話があるって」

「私に？」

さすがに予想していなかった展開に比翠は面食らった。父や呉服店が多少名の知れたものでも、比翠を知る者はそうそういない。

「挨拶してちょうだい。もちろん失礼のないようにね。勲功華族とはいえ、男爵様よ」
続いた言葉にさらにぎよつとした。花宮家は華族ではない。比翠が知る限り、付き合いもなかったはずだ。

「なぜ、華族の方が私に」

「知らないわよ。ああでも、感謝しなさいよ」

感謝という言葉にますます混乱しかない比翠に、継母はにっこりと笑った。

「その人のおかげで、借金もあなたの縁談もなくなったのよ」

「え？」

「それにね、とっても助かるお話もしてくださってるの。だからあなたがへまでもし
たら大迷惑なのよ。わかる？」

継母の口調はいつも以上にねっとりとしていた。ずい、と詰められて比翠は息を止
めて頷く。

「喜代子様、お客様がお待ちです」

見かねたように、使用人が継母を玄関の中へと促す。もう初老といっても差し支え
ない彼は、比翠が唯一昔から知っている使用人だ。彼が比翠に目礼をくれる。

継母は何も言わずさっさと中へと入っていった。わけがわからないものの、とりあ
えずあとに続こうとした比翠を、穂風がそっと止めた。

屈んだ穂風の顔が比翠の耳元へ寄る。

「厭な予感がします。お止めはできないでしょうが……ご注意を」

低い声でそう耳打ちされ、比翠はその顔を見た。真剣な瞳がすぐ横で自分を見つめ
ている。

わかったと言うべく頷いて、比翠は屋敷に入り応接室へと向かった。穂風もその後
ろをついていたものの、部屋に入る前に継母に止められる。

「使用人には関係のない話よ」

抵抗を見せる穂風を、比翠は厳しく注意した。大丈夫だからここで待っていなさい。
その言葉を聞けば、あくまで使用人の穂風はそうするしなくなる。

「お待たせいたしました」

人が変わったかのような声音で、継母は応接室の扉を開け歩みを進めた。比翠も静
かに続く。

「こちらが長女の比翠です」

そう紹介され、比翠は顔を上げて上座に座る客人のほうを向いた。

そして目を疑った。思わず声が出そうになって、必死にこらえる。

そこに座っていたのは、あの夜、比翠の首を噛んだ吸血鬼だった。

月明かりに浮かんだあの顔を、忘れることはない。

暗い灰色の髪を撫でつけ露わになった額に角はなく、その姿は人間のそれとまった
く変わらない。上等そうな洋服に身を包み、足を組んで肘掛け椅子に座るその姿は、
西洋絵画に出てきそうなほど、完璧に整っていた。

「比翠、こちらの方が男爵の東久世千牙様」

しかも華族で名前まである。吸血鬼とはいかなる存在なのか。比翠が緊張とともに
ざわざわとした感覚に囚われていると、男に見えぬ位置で継母に小突かれる。

「初めまして。花宮比翠と申します」